

平成 28 年度第 2 回ちば文化振興懇談会 開催結果概要

1 日時 平成 29 年 3 月 14 日（火）午前 10 時～12 時

2 場所 ホテルプラザ菜の花 3 階 菜の花 3・4

3 出席委員

加藤修委員(座長)、鈴木通大委員(副座長)、飯田重行委員、大熊雅美委員、影山美佐子委員、草加叔也委員、椎名喜予委員、鈴木勲委員、安田一夫委員、湯浅真奈美委員 以上 10 名

4 議事の概要

(1) オリンピック・パラリピック文化プログラムについて

ア 国等の動きについて

「資料 1～3」により事務局から説明。

イ 県の取組について

「資料 4～5」により事務局から説明。その後、質疑応答。

【委員】

昨年 4 月に佐原を含めた北総の四都市が江戸紀行の町並みということで日本遺産に登録され、昨年末には佐原の山車行事がユネスコの無形文化遺産に登録された。佐原の地域としては、これをチャンスと捉えて様々な場面で発信していきたいと考えている。1 月のシンポジウムでも、それぞれの地域の特性を再確認できたので、これから事業が展開できたらいいと思う。

【委員】

日本遺産をオリンピックに向けて増やす予定はないのか。例えば、現代史に近い、遺産にすべきものは検討していないのか。

【県】

建てられてから 50 年以降のものについては、国の制度に則って登録文化財ということで進めていて、流山市に残っている唯一の昔の電灯である街路灯が文化遺産となった例がある。こういったものをこれから市町村と連携して評価や掘り起こしを進めていくということで、市町村の積極的な発見や掘り起こしについて側面から支援できればと思っている。

【座長】

検見川の送信所が気になっている。歴史的に第二次世界大戦の負の遺産だとは思いますが、朽ちていくと忘れ去られてしまうと思うので、歴史的な意味合いのあるものを守っていく、繰り返さないために守ることも必要かなと感じている。

伝統ももちろん守るが、私たちが生きている今も時間が経てば一つの伝統になるので、現代史も守らなくてはいけないものになるのではないかと思う。

【委員】

日本遺産の北総四都市の取組について、今、中央博物館で展示しているが、文化会館でもそういう展示をしていきたいと思っている。また、これから2020年へ向けて、北総四都市に近い旭市に東総文化会館があるので、銚子や成田等と連携を取りながら千葉交響楽団の演奏等を含めて新しいプログラムをやりたいと考えている。

2020年に向けて場所を変えながらやり、また、2020年以降もつながっていくようなものにしていきたい。

ウ ロンドン2012文化オリンピックについて（湯浅委員から説明）

【座長】

ダンスなどはもともとやっていたものを文化プログラムとしていくために、つなぐ作業があったと思う。オリンピック前、オリンピック開催中、その後という3つの段階があると思うが、まずつなげるという作業はどのようにやったのか。

【委員】

多様なアプローチがあったと思う。文化プログラムのフェスティバルのディレクターが各地の団体と調整したものもあるし、2012年を契機に生まれたものもある。

例えば、湖水地方で非常に美しい自然の風景がいっぱいあるが、観光客は減っているところがあった。ここはアーティストの集団が、日本で言えばNPOの人たちが自治体と交渉をしながら働きかけをして、資金を獲得し、大きなアートフェスティバルを2009年頃にスタートさせ、2012年を目指してやっていったという例がある。

【座長】

大会の後にどのようにつなげたのか。観光客が増えて、いい国だな、いい場所だなという印象が強くても、それだけでは持続しないと思う。

例としてダンスを取り上げたが、その他に戦略としてはどういうものがあるのか。

【委員】

スコットランドの音楽のプロジェクトは今も続いている。いろいろなサポートを得やすい状況もあるので、オリンピックを契機にしてうまく利用しながら作っていき、その後は自分のミッションとしてやっているところもある。

【座長】

助成金をもらっているとかそういうことではないのか。

【委員】

英国の場合、100%助成金で実施されている事業はほとんどない。今は、公的助成も減っている。例えば、芸術団体が企業との関わりが上手になったり、オリンピックの中で新しいパートナーシップが生まれたり、経営自体の力強さが高まっていったというのも、ロンドン五輪のレガシーの一つである。

エ 千葉県での文化プログラムについて（意見交換）

【委員】

既に参画プログラムに参加していて素晴らしいプロジェクトだと思うが、千葉県はどのような形で文化プログラムをしていくのか、推進体制はどうなっているか。

【事務局】

この懇談会が外部の有識者から意見をいただくという一つの推進体制だと思っている。

市町村については、現時点では特に推進体制というのはないが、先月、組織委員会、内閣府、文化庁にもお越しいただいて市町村及び文化関係団体の方には文化プログラムについて説明したところである。

県としては、参画プログラムや beyond プログラムを市町村でも実施してもらえよう促進していく立場にあるので、我々県民生活・文化課が中心となって、市町村と情報交換をしながらプログラムを促進していきたいと思っている。

【委員】

英国も全てがうまくいったわけではなくて、いろいろ失敗を繰り返しながら最終的にこういう形になったというところはある。

一つの失敗としては、フェスティバルの核を作るディレクターの就任が遅かった点だ。当初、いろいろな団体やいろいろな人たちがバラバラにプログラムを展開していたが、核となるものがなかった。そのままいくと文化プログラムは誰も何もわからない、イメージもつかないまま終わってしまうのではないかという大きな危機感の中で、統率する人が必要とされ、組織が整備されて、ディレクターが雇われた。

現段階で大事なものは、千葉県としてどういうストーリーを作り、それを伝えていくのか、何を目標にしていくのかで、それが明確になるといいと思う。

日本の議論の中では、イベントの数を目標として言われることが多いようだが、英国の場合は数を目標にしたことは一度もない。それよりも誰を対象に、何を目標に実施するのかというのが大事な点である。また、どこの地域での発信に重きを置くのかによってデザインも変わってくるので、フレームワークを作るといいのかなと思う。たとえば佐原などは、文化遺産の多い地域で、都心に近いけど自然もあったりする。その中で何を残していくのか、そこを明確にしないといけない。

もう一点、ほとんどのプログラムが数年前からずっと準備をしている。今、参画プログラムや beyond プログラムの枠組みがあるが、それを利用して、ここ数年はワークショップや参加する基盤を作っていく、2020年に大きく発表するようなデザインがいいのではないかというようなアドバイスが英国の方からあった。

【事務局】

貴重な意見をありがとうございました。これから4年、ロンドン五輪の成功事例も

参考にしながら、千葉らしいプログラムが実施できたらいいと考えているので、委員の皆様引き続き御支援をいただきながら実施していきたい。

【座長】

ここで先生方からいろいろな意見が出ている内容を、どうやって具体的にしていくか、どういう風に生かしていくかは県にお任せするしかないなので、ぜひよろしく願いしたい。

【委員】

3つ申し上げたいことがある。

まず1つ目は、今の資料4と資料5、特に資料5が実際にアクションプランとしてやられていることだが、この間のつながり方がよくわからない。千葉県の文化振興の取組方針が、何を実現するために5つのプログラムを実施されているのか、少し明らかにした方がいいと思う。それをすることは、何をしたら成功したのかという評価にもつながるので、一度整理した方がよいと考える。

また、これから4年間で何を取り組んでいくのか、具体的な実施内容等を組み立てていく必要があるだろうと思う。

既存の活動をピックアップしていくのはすごく重要なことだと思うが、地域を越えた交流を起こして、そこから新たな創造をしていき、そのことによって街を変えていくような、1つの大きな試みというのもあった方がよい。ロンドンではたくさんの試みが行われていて魅力的なプログラムがあるので、アイデアのソースをうまく活用してやってみるのはどうかと思う。

もう一つは、2020年以降を語る必要があるだろうと思う。オリンピックの話題になるとレガシー、ビヨンド、サステナブルという言葉がよく出てくるが、まさに2020年以降のことをどうするか、どうつなげるかという考え方だと思う。東京都は、2020年に向けた取組以外に2040年の東京の都市像とその実現に向けての道筋について示そうという試みを行っている。都市像まで語るというのは難しいかもしれないと思うが、文化のあり方というのを何か示していければと思う。少なくとも、世界の窓口である成田空港を持ち、東京観光のそのほとんどがディズニーランドだという大きな施設を持っているので、そういうところをうまくインバウンドとか観光につなげていくということも一つの千葉らしさになるかもしれない。その辺をうまく活用して、今までやってきたこと、今やろうとしている文化の振興の取組を整理すること、2020年までのプログラムを明らかにしていくこと、それ以降につなげられるプログラムにしていくということが必要なのではないかと思う。

【委員】

海外から日本に来られる方々の旅の要求は何だろうと思ったときに、バックパッカーの方々は旅行に求める質が高い。それは、観光地を観光するよりも、いろいろな深

い文化に触れたいのではないかと素人ながらに思っている。

その時に一つ注目しているのが道の駅。道の駅は地域ごとで売りにしているものが違う。もし、同時多地域的に何か発信し続けていき、終わってからも地域の活性化につなげるとするなら、道の駅ならぬ文化の駅という発想があってもいいのではないか。たとえば高校生の吹奏楽、野点（野外での茶会）、和太鼓などの文化活動を少しずつやりながらだんだん大きくして、地域の方々の「これが自慢だ」というものを持ち寄って同時にやっていき、それを情報交換してつなげれば、センター（中心的なもの）にもなる。大・道の駅、道の駅本店みたいな発想で作っていくのも面白いのではないか。

【座長】

既にあるものを使いながらという意味では、すごく斬新なのではないか。

【委員】

千葉県には、道の駅が25くらいあるので面白い発想だと思う。私も観光というところはずっと仕事をしてきたが、まだまだ大半というか99.9%の人が、オリンピックは世界のスポーツの祭典だと思っている。

生活そのものが文化であることを理解してもらうために、千葉県として何をやらいいかという根本的な考え方を決めない限り、議論がばらけてしまう。せっかく日本に、あるいは千葉に来ていただくわけだから、千葉の生活文化を見てもらうために何をやっていくのかを具体的に決めておかないといけないのではないか。

それから、日本の国民性になると思うが、議論ばかりして決める人がいない。千葉としてもきっちりと仕切れる人を決めた上で、文化芸術イベントの最終的に担当される人をできるだけ早く決めていくことが、極めて重要ではないかと感じた。

その次に、千葉県が持っている元々の生活文化が、魚を中心とした食文化であったりするが、例えば道の駅でなぜこの商品がでているかという、まさに地域の生活文化ということに地元の方々も気づいていないと思う。そういったことを発信していくと、その集大成が千葉県全体になるのだろうが、誰かがまとめていかないとこの議論は全体がまとまらない気がする。

それと、例えば観光では、フランスを抜いてイギリス（パリを抜いてロンドン）がインバウンドでナンバー1になった。これは大変すごいことだと思う。日本は昨年度約2,400万人になったけれども、これもプロモーションがよかったからではなく、政府がビザの要件が緩めたから増えた要素が大きく、まだまだ地域がやることは足りていない。2020年には4,000万人と言っているが、2020年以降にインバウンドの客を多く呼ぶために、日本に来られた方々に、成田のインアウトも含めて千葉県に滞在してもらうためにどういうことをやるか、それぞれの目的に合わせたイベントを組んでいかない限りなかなか進まないのではないか。今の観光客の興味は日本人だそうで、日本の文化というか日本人の生活に一番興味がある。したがって、土産屋に行くのでは

なくて、商店街やスーパーで買い物することが旅の楽しみということになると思うが、まさに道の駅なんていうのはぴったりで、その集大成が千葉ということになる。

北総四都市が日本遺産になったが、武家の町、門前町、商業の町、水産業の町、これを放っておくとバラバラになってしまうから、江戸文化としてどうやって面として見てもらうかということを中心に徹底的に議論してやれば、北総四都市でイベントを計画できるだろうと思う。せっかく千葉で、あるいは一宮で大会があるので、そこに来ていただいている外国人の方々に、北総四都市が、これぞまさに千葉における江戸文化の庶民の生活だったのだという地域を見てもらう仕掛けをそれぞれの町でやっていかないといけないような気がする。

ロンドンやパリは屋外をうまく使っている。千葉にはランドマークがないが、ランドマーク的なものをつくっていく。イベントも屋外をうまく使ったものができたら面白いと思う。

【座長】

繰り返し出ている意見としては、軸になるものをまとめてリードしてくれる人を決める。既にあるものを使いながらということでは、道の駅が挙げられる。箱ものだけでなくシステムを作れば継続できる。

【委員】

千葉市の外国人向けの簡単なマップを作ろうとしたときに、ランドマークを考えたが何も思い当たらなかった。会場は幕張周辺になると思うが、何がランドマークになるのかなと思ったりする。

【委員】

座長が言ったとおり、全体のディレクターを持つことがすごく重要だと思っている。2020年に向けては、東京オリンピック・パラリンピック CHIBA 推進会議というものもある。おそらくそこでスポーツ・文化・国際交流と全体的なビジョンを持っているので、そこを中心に考えていけばいいと思う。

2つ目としては、県内全体にはいろいろな事業を既にやっていて、ランドマークとして思い浮かぶところはなくても、小さなスポットはたくさんあるので、全体のプログラムをまとめることはすごく大事なことだと思う。全体の情報を共有し、全体的にまとめて情報を発信し、共有することが大事だと思う。

3つめは、多様性、言語、障害をお持ちの方々のことも大事だと思っている。先日、子ども歌舞伎を上演した時に国際交流員に何人か来てもらい、面白かったと言ってもらえた。説明も英語、中国語、韓国語等があればもっとたくさんの人に楽しんでもらえると思う。また、成田空港で琴の演奏などを少しやっているが、その時に神田外語大学と一緒に英文のパンフレットを配ったところ、通りかかった人が見てくれたりした。小さいことを一つずつ積み重ねていくことも大事だと思う。

また、少年少女オーケストラというジュニアオーケストラを持っており、既に海外のユースオケとも共演している。そういった活動を増やしていくとともに、2020年の時も何かの形で参加したいと思っている。それを世界に発信して、世界との交流を増やしていくことができるといいなと思う。

千葉大学と狂言のワークショップをやって公演したりしているが、多言語でできるようになるといろいろな形でもっと発信できる。2020年は、一つの機会であって最終目的でないと思っている。ロンドンのようにたくさんの人に来ていただき、たくさんの方に参加してもらい、そんなことが増えていくといいなと思っている。

【座長】

1つのきっかけとして2020年があるということ。それと点を面にするという話。人の動線として成田というのは、多くの人が集まるという点でも、提案していく形としては有効だと思う。

【委員】

ビジネスマンの視点で話を聞いて思ったのは、要はオリンピックという世界規模のお祭りを活用して何かをアピールしたいみたいなことなのかなと。それを考えた時に千葉県の強みは何か、何をどうやって売り込みたいのか、大体こんな風にしてビジネスは考えていくが、その時にどのくらい投資しなければならないか、組むべきパートナーは誰か。コンセプトがあって、それを推進するためのチームがあって、それを引っ張れる人は誰か、そういうステップを踏んで進めていかれるのかなと。

ただ、資料を拝見していると、既にいろいろ検討してやっていて、それとの整合性、どうやってシンクロナイズさせるのかが正直今日の話だけではよくわからなかった。せっかく東京にオリンピックがやってくる。千葉で一部の競技が開催される。このチャンスを生かして、20~30年経ったときに、それが千葉の伝統行事みたいにして残っている、というのがゴールイメージなのかなと理解した。理解はしたが、具体的に何をどうやっていったらいいかはわからないので、例を示して聞かせてもらえれば、ビジネス視点で御意見申し上げられるかと思う。

【委員】

2020年に向けての文化振興をプロデュースするということの素材を提供するという立場でお話をさせていただく。

私共の音楽振興協議会は、千葉県の交響楽団協会、吹奏楽連盟、合唱連盟、マーチング連盟、更には小中学校の音楽の先生の研究団体県音研、高等学校の音楽の先生の研究団体高音研、これらが活動の主体である。また、準加盟団体として、三曲協会が邦楽関係だが協力いただいて、毎年イベント等音楽振興に関することをやっている。

千葉県の吹奏楽は全国に誇れると思う。千葉県吹奏楽王国とよく言われるが、レベル的には全国トップクラスの力を持ったバンドがたくさんあり、これは何かに生かせ

ると思う。例えば、昨年、千葉県吹奏楽連盟 65 周年記念の演奏会を 5,000 人入る幕張メッセイベントホールで開いたが、有料でもチケットは即完売である。小中高の全国レベルの学校を一堂に集めてオリンピックを盛り上げるようなイベントを組むことはできると思う。それ以外でも吹奏楽を使ったイベントはいろいろ考えられると思う。

また、音振協は毎年、音楽祭をやらせていただいているが、これは毎年各地を廻って開催している。お客さんは高齢者が多いが、最後にオーケストラをバックに全体合唱をすると皆さん本当に積極的に参加してくれる。そういう方々を巻き込んだイベントも組めるかと思う。高齢者が非常に生き生きと参加し活動しているところも一つの素材になるかなと思う。

【委員】

オリンピックというと、どうしても発信ということに重きがおかれ、どう発信していくかという議論が非常に多いと思うが、もう一つの視点というのは、誰に向けてやっていくのか、誰に参加してほしいのかなのかと思う。先ほど紹介したウエスト・ミットランズの人口が 560 万人くらいだが、文化プログラムに 270 万人の地元住民が参加していて、25 歳以下が 100 万人参加しているというデータが出ている。ウエスト・ミットランズはダンスを使ったが、大きなプログラムを何年間かやった中の 1/3 の方はこれまでダンスをしたことがない若い人たちだった。どの層の人たちに参加してもらいたいのか、今まで交響楽団を聴いたことがない人か、高齢者か。高齢者の方々が生き生きと暮らしていくために文化がいろいろな役割をしていると思う。

英国のプログラムの特徴として、観客が受動的に観るということよりも、主体的に参加するものが非常に多い。今、既に子どもたちが、ジュニアオケとか吹奏楽団をやっていると思うが、そういった主体的に参加していく人が増えていくようなプログラムのあり方もあると思う。

【委員】

地元地域の中で、どう参加していったらいいかという視点から考えると、やはりこの機会に地域の中で本当に残すべき文化がたくさんあるはずなので、地域で何を大事に育てていくかということの見直しをして、発信の仕方、参加の方法を地域の中で主体的に作りあげていくことが重要だと思う。

地域の中での活動しやすいような側面的な支援を行うことによって、2020 年が終わった後に、地域の方々が千葉県の伝統文化に自信と誇りを持って様々な活動をしていけるような環境を作ることができたらいいと思う。

【委員】

千葉県の文化を考えた場合、伝統的なものは各市町村にある。先ほどの参加型ということであれば、核がばらけるということは小さい核がいっぱいあると考えていただければよいが、それぞれの地域にそれぞれの伝統文化というものがある。3.11 の後、

地域復興をしていくときに一番大きな目玉となっていったのが民俗芸能であり、その地域で今まで培ってきた文化を、それを核として生きがいに通じて、これをみんなに見てもらえることが新しいエネルギーになっていった。

千葉の場合も 2020 年を機会にして、さらに文化を後世に伝えていくという重要な役割がある。同時に、地域を越えて、それぞれの地域の文化を尊重し合ってネットワークを使って盛り上げていけば、大きな目玉となると思う。

もう一つは生活文化。何を食べ、どう作ってきて、どう提供してきているのか。地域の人が一番活発にやっていることを発信していく。千葉は成田空港やディズニーランドだけではない。ランドマークも高いものだけではない。まだまだ知らないこともたくさんある。千葉県の中でも伝統的な地域と新しい地域があり、さらに地域を越えた新しいコミュニティが形成されるようなプログラムを作って発信していけたらいいと思う。

【座長】

今日もいろいろな意見がたくさん出たが、事務局の方でうまくまとめて、実際、形になることを願っている。

音楽は強いなというのがあるので、まずは誇れる音楽をやってもらいたいが、美術もお願いしたい。美術は実際にやると敷居がすごく低い。鉛筆 1 本で描くところから始められる。誰か全体をまとめることができれば、ぜひ、視覚と聴覚に訴えかけるようなことをやってもらいたいと思っている。

非常に規模は小さいが、西千葉で壁画が完成した。近隣の小学校の子どもたち 3, 4 年生に参加してもらって、駅を元気なものにしようということで、ワクワクするというキーワードで 1 枚ずつ描いてもらった。参加してくれた全員 500 点の作品を壁に貼り込んだ。珍しいと思うが、駅構内に地域連携型の壁画というシステムを作って今回 2 回目にして完成した。もっと大きい規模を統括できるような方がいれば、子どもたちが大人になったときに残る。美術は制作過程とともに、何らかのものが物証として残るので、一つの特徴として使ってもらえるといいなと思う。

【委員】

地域にお宝がたくさんあるので、まずそれを発見するというのが重要な作業で、これを機会にどう整理をしてどう組み立てていくかというのを次に考える。お宝がどれだけあるかということをもまずみんなで共有するのも 1 つだと思う。

また、新しい文化の創造を考えた方がいいと思う。対極にあるのが、芸術文化の高さと広さである。高さはプロデューサーを呼んで新たに作っていく作業が必要かもしれない。逆に広さが重要な地域の文化に関しては、それをうまく組み合わせで展開していく。それに、たくさんの方々が地域を越えて参加してくれるような仕組みを作っていく。縦軸だけでなく、横軸として広域的な話と地域への発信と 2 つを見据えてど

ういうプログラムが作れるかというのを考えた方がよい。

まず、理念的に目標から作っていくのではなくて、あるものから文化振興の取組につなげていくということを考えた方がいいと思う。1つのプログラムが1つの取組の目標に合致するわけではなくて、障害者の方々の参加を促したり、地域の交流を促したり、街の魅力を発信したりといろいろな効果があると思うので、それをうまく表現していく方がいいと思う。

【事務局】

長時間にわたりいろいろな御意見をいただきありがとうございました。今日の話も踏まえて次につなげたい。